

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

今回釜石市松倉町甲子仮設を訪れたのは、仮設内で配布する情報紙の試し刷りを見てもらい、自治会のみなさん、住民の方々に直接意見をもらうためであった。なぜ情報紙の作成を、学生が引き受けることになったのか。これは昨年に岩手県遠野市で行われた、遠野プログラムまでさかのぼる。

遠野プログラムは2011年東日本大震災が起こった年から始まった、ボランティア活動である。そこから少しずつ姿を変え、ボランティアと地域資源の発掘を兼ねた活動となり、2015年現在まで続けられている。遠野市に滞在しながら、被災地へボランティアに向かうという、震災当時に遠野市が行っていた後方支援の形を真似ながら、長期休みに活動を行ってきた。

震災当時私は高校生で、テレビの画面に映し出される津波や地震のすさまじい状況に言葉を失っていた。今まで通り普段の生活を送ること、つまり、物を買って、食物を食べ、学校へ行くことが日本経済をまわすことになり、結果的に支援となる、という情報番組のコメンテーターの話を聞いても、それでも何もできないことが、悔しかった。そんな思いを抱え、大学に進学し、遠野プログラムと出会った。参加し始めた理由はもちろん被災地をこの目で見てみたい、力になりたいという思いからだった。

しかし、被災地支援の内容は、毎回の遠野プログラムでは異なっていた。被災地見学ということで陸前高田や宮城県の気仙沼を訪れたり、仮設住宅のみまもり活動に同行させてもらったり、仮設住宅のイベントに参加したり、様々な経験をしてきた。毎回異なる被災地支援に「これでいいのか」という思いを漠然と感じながらも、他に何をしたらいいのか分からないまま、遠野プログラムに参加し続けた。

そんな中、昨年の夏に行われた遠野プログラムでも、また（学生にとって）新たな支援場所である、釜石市桜木町仮設を訪れた。釜石では仮設住宅の集約が始まっており、復興公営住宅に引っ越す人、あらたな仮設住宅に移る人、もとの仮設住宅に残る人、とせつかく繋がれつつあった震災後のコミュニティが、この仮設では崩れてしまうことを示していた。しかし、住民の声だけではどうすることもできない問題だった。新たな場所で、新しいコミュニティの中で生活がスムーズに始められるようになってほしい、という自治会の方々の思いもあった。そこで、私たち学生が、仮設の集約が始まるまでに、桜木町仮設の「繋がり」を強くするためにはどうしたらいいのかということを考え、提案することになった。1日目は自治会へのヒアリング、2日目は仮設の交流会の中で提案を行うという形になった。結果として感じたのは、私たちには何もできない、ということだった。何かできるかもしれない、という気持ちがあったが、何の専門家でもない、学生が、住民の生活の力になれることなど簡単に見つけれないと思った。しかし、何もできないということを感じたからこそ、被災地に対する態度や姿勢が私の中では変化した。話を聴く大切さ、そして、何もできないと感じているのに、どうして私は被災

地に関わり続けたいと思っているのか。そんな疑問も持つようになった。

そんな夏の遠野プログラムを経て、釜石での活動が独立して動き出すことになった。プログラム中に訪れた桜木町仮設ではなく、甲子仮設という、同じく集約の対象になっており、2016年の夏には無くなってしまいう仮設で配布する、情報紙の作成をすることになった。仮設でのコミュニティが無くなってしまった後でも、新たなコミュニティの担い手の一人となれるように、心の体力をつけてほしいとの自治会の方々の願いから、この活動は始まった。A・B・C・Dの4つに分かれている甲子仮設のイベントカレンダーの掲載をメインに、住民の方が興味や関心を持ってもらえるような記事を学生が執筆、掲載し、仮設内でのイベントに参加をしてもらえるようにすることが、主な目的である。1ヶ月に1回の情報紙発行を目指し、ここでは学生による社会批評やコラム、お年寄りむけの俳句・短歌コーナーや小さい子どもむけの絵本紹介、他に行われている被災地支援紹介などを盛り込んでいく予定である。また、拡大版として、2ヶ月に1回甲子仮設を訪れた際のインタビュー記事や住民の一声を集めたコーナー、料理レシピ紹介、イベントの感想記事なども掲載していく予定である。今回この国内研修制度を利用し甲子仮設を訪れたのは、情報紙の試し刷りを読んでもらうこと、そして仮設で行われた年越し餅つき大会のお手伝いをするためであった。情報紙に関しては、レイアウトの工夫、読みやすさ、どんな記事が読みたいかといった具体的などころまで意見交換をすることができた。予想していた以上に、自治会の皆さんに喜んでもらったことが嬉しく、さらに活動意欲が高まったように思う。記事の執筆やレイアウトと言った技術的な部分では、まだまだ未熟なところばかりだが、これから多くのことを吸収していきたいと考えている。また、餅つき大会を通して、法政大学の学生という認識を持ってもらったように思う。情報紙の発行にいいスタートが切れたと感じている。

最後に、これは活動団体自体の目的というよりは私個人のものであるが、東日本大震災を忘れないために活動し続けるという目的がある。先にも述べたが、専門性の欠片もない一学生が被災された方々の生活の本当の力になることはできない。震災を「忘れない」ことが、大切だとよく耳にする。「忘れない」という言葉に、どれだけの説得力があるのだろうか。時々思い返して、ああこんなことがあったね、などと語ることが本当に大切なことなのだろうか。人は未来を向けば向くほど「忘れ」ていく。何もしなければ、過去の出来事として流れていってしまうだろう。私は、ただ流してしまっただけではないものだと思う。だから「忘れない」ためには、触れ続けるしかない。住民の方々との交流を持ち、できることをしていくしかないのだ。たとえ、できることがないと痛感していたとしても。幸い、私のいる環境では、触れ続けることができる。現代福祉学部という場所にいるからこそ取り組めることだと、ありがたさを噛みしめている。これからも学業をおろそかにせず、自分の意見を保って、情報紙作成の活動をしていきたい。